別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名：金　賢旭

金賢旭氏の博士論文「翁信仰の生成と渡来文化」は、能のルーツである翁猿楽に結実するべく、12 世紀（院政期）頃から頻繁に現れるようになる翁神とこれをめぐる翁信仰について、韓半島からの渡来文化との関わりで捉えようとした比較文化論的考察である。

この論文は、二部構成となっている。

第一部「古代から中世における翁の諸相」では、塩土老翁を中心とする古代の翁から、住吉神の平安時代中頃からの翁としての現れを論じて中世に及び、中世での多様な翁神の姿が語られる。

第二部「渡来文化と翁」では、渡来氏である秦氏の氏族信仰とオーバーラップする形で日本の山岳信仰を捉えながら、八幡神、稲荷神、松尾神、走湯山権現等々の信仰に見られる翁の現れが述べられ、それが、新羅時代の花郎（ファラン）文化にさかのぼる韓半島の山岳信仰に類似することが指摘され、韓半島からの山岳信仰の日本への流入という視点から、翁の多出現象が説明される。最終章では、逆に、韓半島の山岳宗教的呪術文化が日本で排除された例として「幻術（マジック）」が取りあげられている。

第一部、第一章の「古代の翁」では、塩土老翁譚や椎根津彦の翁への変身譚を通して、中世の翁へと濃厚に流れてくる、翁の媒介者あるいは芸能者としての性格が分析されており、今までにない翁の芸能史的整理として有益であった。また、第二章「翁と住吉明神」では、住吉神の現世への現れの歴史的変遷を丹念に追い、塩土老翁の影を負いながら、11 世紀頃から住吉神が翁神として現れることに対して、白楽天の老人図の換骨奪胎である柿本人丸の老翁像を視野に入れ、院政期の神仙思想の強力な影響下において、住吉神の翁としての現れが恒常化していったと論じたところはユニークであった。

第二部の特色は、院政期から中世にかけて多く現れる翁神について、渡来性という光源から強いライトをあてて考察するところにある。

住吉神とならんで、早くからその信仰領域に翁の姿を現出させる八幡神、さらには稲荷神や松尾神もまた、渡来系の秦氏集団によって祭られた神であり、中国からの渡来の翁として姿を現す新羅明神、赤山明神、摩多羅神などもじつは韓半島と関わりの深い神々であった。

ことに八幡神、稲荷神、走湯山権現に見られる翁と童の互換構造に金氏は注目する。翁猿楽における翁/千歳、父の尉/延命冠者という翁童のペアーの原型がそこに存在すると考えられるからである。

さらに金氏は、八幡神などに見られる翁童信仰の源流を、古代新羅時代のシャーマニスティックな山岳宗教であり稚児文化でもある「花郎（ファラン）」文化に見て、両者の共通

性を指摘する。この韓半島の山岳信仰が日本に流入し、彦山修験に典型的に見られるように、日本の山岳信仰に決定的な影響を及ぼし、そのような土壌から、翁と童が互換しつつ神のかたどりとなって現れはじめ、翁が活躍する中世を迎える、とするのである。このような歴史の記憶が集約されたものとして、世阿弥や金春禅竹が書き残した秦河勝伝承を捉えるのが金氏の立場である。

中世の翁信仰について語った書として、すでに山折哲雄氏の『神から翁へ』（青土社、1989年）があり、巨視的な視点から宗教上の翁神が論じられているが、そこには、渡来性という金氏が論じた視点は欠けている。

金氏によって、渡来という視点から、翁神の出現現象を見ることで、翁信仰の本質的一側面がよりはっきりと見えてきたことは確かであり、この論文は、日本の芸能史・宗教史上で大きな意味をもつだけでなく、韓国語に翻訳されたあかつきには、韓国の日本学・古典学を引っ張っていくリーダー的論文となることは疑いのないところである。

資料の取り扱い方の未熟な面への指摘や、論文全体が翁猿楽の成立の解明への果敢な挑戦を保留したこと、視座が日韓間の基軸に限られたこと（中国を含めなかったこと）への注意がなされたものの、本論文が全体として、先駆的・独創的な研究となっていることについては審査員全員の間で意見の一致を見た。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。